

設計書ハ可成詳記スルヲ要ス  
四豫算  
建設費ノミヲ披抄スヘシ

### 獸疫豫防法規

#### 獸疫豫防法

明治廿九年三月廿九日  
法律第六十號

第一條 此ノ法律ニ獸類ト稱スルハ牛、馬、羊、豕、犬ヲ謂ヒ  
獸疫ト稱スルハ左ノ十病ヲ謂フ

- 一 牛疫
- 二 炭疽
- 三 氣腫疽
- 四 鼻疽及皮疽
- 五 傳染性胞膜肺炎
- 六 流行性鵝口瘡
- 七 羊痘
- 八 豕虎列刺
- 九 豕羅斯疫
- 十 狂犬病

第二條 獸類獸疫ニ罹リタルコト若クハ其ノ疑アルコトヲ發見シタル所有者管理人又ハ獸醫ハ直ニ其旨ヲ所轄警察署又ハ市町村長(特別市制ヲ施行スル市ニ於テハ區長、市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區戸長、又ハ之ニ準スベキ者)ニ届出ヘシ所有者又ハ管理人ニ於テ狂犬病ニ罹リタル獸類ヲ撲殺シタルトキ亦同シ

第三條 獸類獸疫ニ罹リタルトキ若ハ其疑アルトキハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ鎖錮シ若ハ健獸ト隔離シ其監督ヲ承クヘシ

第四條 牛疫感染ノ疑アリ又ハ之ニ罹リタル牛、羊及狂犬病ニ罹リタル犬ハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ撲殺スヘシ

前項ノ所有者又ハ管理人現場ニ在ラサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ニ於テ直ニ撲殺シ及病毒ニ汚染シ又ハ其ノ疑アル物品ヲ燒棄、埋却シ若ハ之ニ消毒ヲ行フコト

ヲ得

第五條 地方長官(東京府ハ警視總監以下之ニ倣フ)ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ病性鑑定ノ爲割檢ヲ要スル獸類ヲ撲殺シ又ハ鼻疽及皮疽、傳染性胸膜肺炎、豕虎列刺

第六條 所有者又ハ管理人第四條ノ指揮ニ從ハス及前條ノ命令ニ從ハサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ニ於テ

直ニ撲殺スルコトヲ得

第七條 病性鑑定ノ爲撲殺シタル獸類ヲ除クノ外此法律ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類ノ死體ハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ燒棄又ハ埋却スヘシ

前項ノ屍體ハ各節ヲ截取シ又ハ部檢ヲ爲スコトヲ得ス但病性鑑定又ハ學術研究ノ爲特ニ地方長官ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第八條 所有者又ハ管理人ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ

指揮ニ從ヒ病毒ニ汚染シ又ハ其ノ疑アル物品ヲ燒棄、埋却シ若ハ之ニ消毒ヲ行フヘシ

所有者、管理人、車長又ハ船長ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ獸疫ニ罹リ若ハ其ノ疑アル獸類ヲ繫留シタル場所、瀛車、船舶等ニ消毒ヲ行フヘシ

所有者又ハ管理人前二項ノ指揮ニ從ハサルトキ及車長、船長前項ノ指揮ニ從ハサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ハ直ニ燒棄、埋却シ若ハ消毒ヲ行フコトヲ得

第九條 此ノ法律ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類ノ屍體及病毒ニ汚染シタル物品ノ埋却地ハ發掘若ハ使用スルコトヲ得ス但シ地方長官ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十條 第四條、第五條及第八條第一項ノ場合ニ於テ地方長官ハ三人以上ノ評價人ヲシテ物品及發病前ノ獸類ノ價格ヲ評價セシメ左ノ標準ニ依リ所有者ニ手當金ヲ下付ス

其ノ評價額ヲ不當ト認ムルトキハ更ニ他ノ三人以上ノ評價人ヲシテ評價セシムルコトヲ得

一 牛疫、鼻疽及皮疽、傳染性胸膜肺炎、豕虎列刺、豕羅斯疫ニ罹リ撲殺シタル獸類 評價額三分ノ一

二 病性鑑定ノ爲撲殺シタル獸類 評價額五分ノ三

三 牛疫ニ感染ノ疑アル爲撲殺シタル牛羊評價額五分ノ四

四 燒棄又ハ埋却物品 評價額二分ノ一

手當金額ハ第一ノ場合ニ於テハ一頭六拾圓第二ノ場合ニ於テハ一頭百五拾圓第三ノ場合ニ於テハ一頭貳百圓第四ノ場合ニ於テハ總計拾圓ヲ越過スルコトヲ得ス

第十一條 此ノ法律ニ依リ左ニ掲クル獸類ヲ撲殺シ又ハ物品ヲ燒棄若ハ埋却シタルトキハ手當金ヲ下付セス  
一 第二條ニ違背シ届出ナキ獸類及之ニ觸接シタル物品  
二 第六條ノ場合ニ於ケル獸類及第八條第一項ニ違背シタル場合ニ於ケル物品

三 狂犬病ニ罹リタル犬及其ノ病毒汚染ノ疑アル物品  
四 第十二條ノ命令ニ違背シ移動シタル獸類及物品  
五 第十五條ノ命令ニ違背シ檢疫ヲ受ケス又ハ輸入シタル  
獸類及物品

第十二條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ區域  
ヲ定メ獸類ノ種類ヲ限リ其出入、往來并病毒傳播ノ疑ア  
ル物品ノ運搬ヲ停止スルコトヲ得

第十三條 地方長官ハ獸疫流行中必要ト認ムルトキハ屠獸  
場及獸類化製場ノ營業ヲ停止シ又ハ獸類ノ種類ヲ限リ其  
市場、共進會等ノ開設ヲ停止スルコトヲ得但此場合ニ於  
テハ直ニ其ノ旨農商務大臣ニ届出ヘシ

第十四條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ區域  
ヲ限リ健獸ノ検査ヲ行フコトヲ得

第十五條 外國ヨリ獸疫侵入ノ危險アリト認ムルトキハ有  
病地ヨリ又ハ右病地ヲ經テ輸入スル獸類及物品ノ檢疫ヲ

行七番 停止スルコトヲ得

第十六條 獸疫豫防ニ關スル費用ハ國庫、府縣、市町村及一  
個人ノ負擔トス其ノ負擔ノ區分ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七條 第四條第一項ニ違背シタル者、第五條ノ命令ニ  
違背シタル者及第十五條ノ檢疫ヲ受ケス又ハ輸入停止ニ  
違背シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

獸醫第二條ニ違背シタルトキハ罰前項ニ同シ

第十八條 第七條第八條第一項、第二項、第九條ニ違背シタ  
ル者及第十三條ノ命令ニ違背シタル者ハ貳圓以上貳拾圓  
以下ノ罰金ニ處ス

所有者又ハ管理人第二條ニ違背シタル者ハ罰前項ニ同シ  
第十九條 第三條ニ違背シタル者及第十二條ノ命令ニ違背  
シタル者ハ刑法第二百四十九條ノ例ニ依リ處罰ス

第二十條 第一條ニ掲ケタル獸類獸疫ノ外獸畜傳染病豫防  
上必要ト認ムルトキハ勅令ヲ以テ此法律ノ全部又ハ一部

ヲ他ノ獸畜傳染病ニ適用スルコトヲ得

第廿一條 此ノ法律施行ニ關スル規則ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

附 則

第廿二條 此ノ法律ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

獸畜傳染病豫防ニ關スル從前ノ規則ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

獸疫豫防ニ關スル費用擔負區分

明治廿九年十一月卅日 勅令第三百七十七號

第一條 明治廿九年法律第六十號獸疫豫防法第十六條ニ依リ獸疫豫防ニ關スル費用負擔ノ區分ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一左ノ費用ハ國庫ノ負擔トス

一 獸類撲殺及物品棄却手當

一 臨時檢疫手當及旅費

一 評價人手當及旅費

一 消毒用藥品費

第二左ノ費用ハ府縣ノ負擔トス

一 器具器械費

一 被服費

一 通信費及器具器械運搬費

一 家屋其ノ他借料

一 雜費

第三左ノ費用ハ市町村ノ負擔トス

一 人夫傭入費

一 標示費

第四左ノ費用ハ一個人ノ負擔トス

一 獸類ノ撲殺及其ノ屍體竝物品ノ棄却ニ要スル費用

一 檢疫獸類ノ繫留ニ要スル飼料其ノ他雜費

第二條 獸疫豫防法第十五條ニ依リ設置スル檢疫所ノ費用

及朝鮮釜山ニ於ケル牛疫豫防費ハ前條第四ニ掲クルモノ  
ヲ除クノ外總テ國庫ノ負擔トス

第三條 北海道廳及沖繩縣ニ於テハ當分ノ内府縣及市町村  
ノ負擔ニ屬スル費用ハ國庫ノ負擔トス

### 獸疫豫防法施行細則

明治三十年一月七日  
農商務省令第一號

- 第一條 警察官又ハ市町村長(特別市制ヲ施行スル市ニ於  
テハ區長市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區長戸長又  
ハ之ニ準スヘキ者) 獸疫發生ノ届出ヲ受ケタルトキハ地  
方長官ニ其旨ヲ報告シ同時ニ其部内ニ榜示スヘシ
- 第二條 獸疫ニ罹リタル獸類ノ全癒、斃死若クハ撲殺ハ所  
有者又ハ管理者ニ於テ獸醫ト連署シ直ニ所轄警察官署又  
ハ市町村役場ニ届出ヘシ
- 前項ノ届出ヲ受ケタル警察官又ハ市町村長ハ地方長官ニ

### 報告スヘシ

- 第三條 第一條及第二條第一項ノ届出ヲ受ケタル警察官及  
市町村長ハ相互速ニ通報スヘシ
- 第四條 獸疫發生ノ届出又ハ通知ヲ受ケ若クハ其發生ヲ探  
知シタル警察官ハ直ニ現場ニ出張シ必要アルトキハ獸醫  
ヲシテ診斷セシムヘシ
- 第五條 第一條及第二條第二項ノ報告ヲ受ケタル地方長官  
ハ直ニ其旨管内ニ告示シ農商務大臣及鄰接府縣ノ地方長  
官ニ報告スヘシ
- 外國ノ獸疫侵入スルカ又ハ一地方ニ於テ獸疫蔓延ノ逃ア  
ルトキハ地方長官ハ農商務大臣及鄰接地並ニ航路ノ關係  
アル道廳府縣ノ地方長官ニ急報スヘシ
- 第六條 地方長官ハ獸疫流行中其狀況ヲ調査シ毎週別記樣  
式ニ依リ農商務大臣ニ報告スヘシ但シ鼻疽及皮疽ハ毎月  
末ニ報告スルモ妨ケナシ

第七條 地方長官ハ獸疫豫防法第十二條及第十三條ニ依リ停止ヲ命シタルトキハ其旨農商務大臣及鄰接地並ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

第八條 獸疫豫防法第三條ニ依リ獸類ノ鎖錮ヲ要スルトキハ之ヲ一定ノ地所ニ繫キ其逸出ヲ防キ又隔離ヲ要スルトキハ病獸ヲ在來ノ場所ニ留置シ健獸ヲ安全ノ場所ニ移シ相互ノ交通ヲ絶チ病毒傳播ノ媒介ヲ防クヘシ

前項ノ隔離ヲ實行シ難キ場合ニハ特ニ警察官ノ許可ヲ得健獸ヲ留置シ病獸ヲ他ニ移スコトヲ得

第九條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ヲ鎖錮シ又ハ隔離シタル場所ニハ警察官ノ許可ヲ得タル者ノ外出入スルヲ許サス

第十條 地方長官ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ヲシテ獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ鎖錮若クハ隔離ヲ嚴重ニ監督セシムヘシ但必要アルトキハ警察官ヲシテ病獸ヲ看守

セシムルコトヲ得

第十一條 地方長官ハ所屬官吏、市町村吏及獸醫ニ檢疫委員ヲ命スルコトヲ得

第十二條 地方長官ハ獸疫豫防法第十四條ニ依リ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ヲシテ健獸ノ検査ヲ行ハシムルヲ得

第十三條 地方長官ハ獸疫流行中屠獸場又ハ獸類化製場ノ監督ヲ嚴重ニスヘシ

第十四條 地方長官ハ必要ト認ムルトキハ豫防區域ノ各要所ニ警察官又ハ相當ノ看守人ヲ配置スヘシ

第十五條 獸類ノ撲殺ハ其所在地ニ於テ行フヘシ但シ特別ノ事由アルトキハ燒棄又ハ埋却スヘキ場所ニ於テスルコトヲ得

第十六條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ屍體ヲ運搬セシトスルトキハ天然孔ヲ塞キ全體ヲ消毒包裹シテ汚物ノ脱漏ヲ防クヘシ其脱漏シタル場合ニハ直ニ之ヲ除去シ其

場所ヲ消毒スヘシ

第十七條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ屍體ヲ埋却セ

ントスルトキハ皮膚ヲ亂截シ消毒藥ヲ散布スヘシ

屍體及病毒汚染ノ物品ヲ埋却スル土坑ハ深サ八尺以上ト

シ屍體及物品ヲ投入シタル後厚ク石灰ヲ散布シ土キ以テ

土坑ヲ填塞スヘシ但シ羊痘、豕虎列刺、豕羅斯疫、狂犬病

ノ場合ニ於テハ土坑ノ深サ四尺以上トス

第十八條 獸疫豫防法第九條ノ埋却地ハ人家、飲料水、河流

及道路ニ接近セサル適當ノ位置ヲ區畫シ木標ヲ建テ人及

獸類ノ往來ヲ禁スヘシ

第十九條 獸疫ノ病毒ニ接觸シタル者又ハ其疑アル者ハ警

察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ消毒シタル後ニア

ラサレハ他ノ獸類ニ接近スルコトヲ得ス

第二十條 地方長官ハ獸疫豫防法第十二條及第十三條ノ停

止ヲ解キタルトキハ其旨管内ニ告示シ農商務大臣及郵接

地並ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

第廿一條 第五條第七條及第二十條ノ報告ヲ受ケタル地方

長官ハ其旨管内ニ告示スヘシ

第廿二條 獸類ノ屍體及其病毒汚染ノ物品ヲ運搬スルニハ

牛痘傳染性胸膜炎及氣腫疽ノ場合ニ於テハ牛、鼻疽及

皮疽ノ場合ニ於テハ馬又炭疽ノ場合ニ於テハ牛馬ヲ用フ

ヘカラス

第廿三條 地方長官ハ狂犬病流行ノ際危險アリト認ムル區

域ニ於テハ所有者ナキ犬ヲ撲殺セシメ所有者ノ記名アル

犬ハ嚴重ニ繋留セシムヘシ但シ使用上必要ナル飼犬ハ口

綱ヲ施シ綱ヲ附シテ牽キ行カシムルコト得

第廿四條 消毒ヲ行ハントスル者ハ警察官及獸醫又ハ檢疫

委員ノ指揮ニ從ヒ獸疫豫防心得ニ掲ケタル消毒法ニ依ル

ヘシ

別記様式



接近ヲ防クコト

第五項 獸疫流行ノ地方ニ於テハ豫防上必要ナル者ノ外ハ  
猥リニ病獸アル家ニ群集スヘカヲサルコト

第六項 獸疫流行ノ地方ニ於テハ傳染ノ虞アル獸類ヲ區別  
シ出入、往來、賣買、讓與ヲナサシメサルコト牛疫ノ場合  
ニ於テハ特ニ其取締ヲ嚴ニスルコト

第七項 獸疫流行地近傍ノ牧場ニハ傳染ノ虞アル獸類ヲ放  
牧スヘカヲサルコト

第八項 水源ニ於テ獸疫流行スルトキ其下流沿岸ノ地方ニ  
於テハ染傳ノ虞アル獸類ヲシテ其河水ヲ飲用セシメサル  
コト又獸體、飼養器具等ヲ洗滌スヘカヲサルコト

第九項 牧場、屠獸場、家畜市場等ニ於テ獸疫發生シタルト  
キハ其病獸ヲ適宜ノ場所ニ圍ヒ置キ健獸ノ接近ヲ防キ速  
ニ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ヲ受クルコト

第十項 炭疽、鼻疽及皮疽ハ人ニ傳染スルノ虞アルヲ以テ

病獸ヲ取扱フ者ハ最モ注意ヲ加ヘ手足、顔面等ニ創傷、潰  
瘍アルトキハ病獸ニ觸接スヘカヲサルコト

第十一項 狂犬病ニ罹リタル獸類ニ咬傷セラレ、トキハ人  
獸類共ニ危險ノ症ニ陥ルヲ以テ狂獸アルノ場合ニハ特ニ  
注意シテ其逸走ヲ防キ成ル可ク人、獸類ヲシテ狂獸ニ接  
近セシメス速ニ之ヲ撲殺スルコト

第十二項 狂獸ニ咬傷セラレタル獸類ニシテ其確徴ヲ現ハ  
サ、ル間持主ニ於テ撲殺ヲ欲セザルトキハ嚴重ニ之ヲ鎖  
錮シ其徴候現ハル、トキ直チニ之ヲ撲殺スルコト

第十三項 病獸ノ糞尿其他ノ排泄物及病獸ニ使用シタル敷  
藁、飼料ノ殘物等ハ散逸ヲ防キ一定ノ場所ニ收集シ警察  
官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ燒棄若クハ消毒埋却  
スルコト

第十四項 病獸ノ取扱人其他總テ病獸ニ觸レタル者ハ其都  
度消毒スルコト

第十五項 撲殺スヘキ獸類ヲ燒棄場又ハ埋却地ニ牽キ行ク  
場合ニハ其道筋ハ傳染ノ虞アル獸類ノ所在地ヲ避ケ警察  
官及獸醫ノ監督ヲ受クヘキコト

第十六項 病獸牽付途中若クハ屍體運搬中ニ於テ糞尿其他  
ノ汚物ヲ漏ラストキハ土共ニ之ヲ除キ去リ其場所ニ濃  
厚石炭酸水、格魯兒石灰又ハ石灰乳ヲ撒布スルコト

第十七項 病獸ノ屍體ハ石灰乳ニ浸セル布片、綿類ヲ以テ  
鼻、口、肛門、陰門等ヲ塞キ濃厚石炭酸水又ハ石灰乳ニ浸  
シタル筵、菰類ヲ以テ全體ヲ纏包シ天然孔ハ成ルヘク上  
方ニ向ケテ運搬スルカ又ハ特別ノ箱ニ入レテ運搬スルコ  
ト

第十八項 病獸若クハ其疑アル獸類ノ屍體ハ皮膚ヲ亂切シ  
石灰乳、粗製石炭酸又ハ石油ヲ注テ埋却スルコト

第十九項 病獸ヲ牽出シタル後廐舎内ノ敷藁、糞便等ハ散  
逸セサル様運搬シテ燒棄シ若クハ石灰乳又ハ格魯兒石灰

水ヲ注キ深ク埋却スルコト

第二十項 廐舎内ハ熱湯汁又ハ熱湯ヲ注キテ充分ニ洗滌シ  
石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注キ窓戶ヲ密閉シ格魯兒瓦斯  
又ハ亞硫酸瓦斯ノ薰煙ヲ行ヒ二十四時ヲ經テ窓戶ヲ開放  
スルコト

第二十一項 廐舎ノ隔壁、障木、床板等ハ熱湯汁若クハ熱湯ヲ  
以テ洗滌シ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注キ「セメント」漆  
喰等ノ床ハ格魯兒石灰水ヲ以テ洗滌シ損所アレハ新ニ修  
理ヲ加ヘ腐朽ノ木壁、床板等ハ成ルヘク取毀チ燒棄スル  
コト

第二十二項 廐舎ノ土床ハ深サ一尺以上掘起シ新鮮ノ土砂ト  
取換ヘ病毒汚染ノ土ハ敷藁同様ニ處分スルコト

第二十三項 病毒ニ汚染シタル金屬製ノ物品ハ灼熱シ木製ノ  
器具ハ成ルヘク燒棄シ其燒棄シ能ハサルモノハ熱湯ヲ以  
テ洗滌シ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注キ曝乾スルコト

第廿四項 糞尿溜及排泄溝ハ汚物ヲ浚渫シ熱瀾汁又ハ熱湯

ニテ洗滌シテ生石灰又ハ石灰乳ヲ撒布シ浚渫シタル汚物  
ニハ強硫酸又ハ生石灰ヲ混シ深ク埋却スルコト

第廿五項 運動場、欄柵等ノ病毒ニ汚染シタルトキハ其汚  
土ヲ掘起シ生石灰又ハ石灰乳ヲ撒布シ欄柵ハ熱湯又ハ熱

瀾汁ヲ以テ洗滌シ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注クコト

第廿六項 牧場ハ病毒ニ觸レタル部分ヲ區劃シ病毒汚染ノ  
土ヲ掘起シ生石灰又ハ格魯兒石灰ヲ撒布スルコト

第廿七項 病毒ニ汚染シタル瀝車、船舶ハ熱蒸氣ヲ用ヒテ  
消毒シ之ヲ用フル能ハサルトキハ熱湯又ハ海水ニテ洗滌

シ石灰乳又格魯兒石灰水ヲ注キ曝乾シ日光ヲ入ル、コト  
能ハサル船室ハ更ニ格魯兒又ハ亞硫酸ノ薰煙法ヲ行フコ  
ト

第廿八項 革具類ハ熱瀾汁(二百倍)又ハ熱石鹼水ヲ以テ洗  
滌シ曝乾シテ後濃厚石炭酸水ヲ施スコト

第廿九項 病獸又ハ其屍體汚物ヲ取扱ヒ又ハ消毒ニ從事シ  
タル者ノ衣服ハ燒棄シ又ハ沸煮曝乾スルコト

第三十項 病獸又ハ病毒汚染ノ物品ニ觸レタル者ノ履物ハ  
燒棄シ靴ハ石灰乳又ハ濃厚石炭酸水ニ浸シ獸脂ヲ塗リテ

曝乾スルコト

第卅一項 獸疫流行地ニ於テハ病獸アルノ家ハ勿論總テ獸  
類飼養者ノ家ニ出入スル者ハ履物ニ注意シ殊ニ牛疫、炭

疽、氣腫疽流行ノ場合ニ入ルトキハ成ルヘク其ノ家ノ構  
外ニ於テ履物ヲ脱シ出ルトキハ石炭酸水ニテ足ヲ洗ヒ後

之ヲ穿ツコト

第卅二項 獸疫流行地ニ於テハ厩舍内ニ多量ノ乾草其他ノ  
飼料及不要ノ器具類ヲ置カサルコト

第卅三項 病毒ニ汚染シタル厩舍ニハ消毒ヲ行ヒタル後ト  
雖成ルヘク長ク傳染ノ虞アル獸類ヲ牽キ入レサルコト但  
シ之ヲ使用セントスルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員

ノ指揮ヲ受クルコト

第卅四項 獸疫流行地ニ於テハ特ニ左ノ衛生事項ニ注意ス

ヘシ

一 獸類ノ健否ニ注意シ清潔ナル滋養、易化ノ飼料ヲ給スルコト

二 獸體ハ勿論厩舎、器具等ヲ清潔ニスルコト

三 厩舎内ニ新鮮ノ大氣ヲ通スルコト

四 厩舎内ノ温度ヲ調節スルコト

五 清潔ノ飲料水ヲ給スルコト

六 共同牧場ニ放牧セサルコト

第卅五項 消毒法及其製法ヲ示スコト左ノ如シ

一 生石灰 厩舎、糞尿溜、屍體等ニ施用ス

一 石灰乳石灰水 (生石灰一分水十乃至十五分)

病毒ニ汚染セル場所、物品若クハ其疑アルモノニ施用ス

一 格魯兒石灰水(格魯兒石灰一分十分)應用石灰乳ニ同シ

一 石炭酸水 濃厚石炭酸水(石炭酸五分水百分) 稀釋石炭酸水(石灰酸三分水百分)

濃厚石炭酸水ハ屍體、金屬、木製ノ器具、器械等ノ消毒ニ供シ稀釋石炭酸水ハ手足等ノ消毒ニ供ス

一 粗製石炭酸 屍體、排泄物、糞尿溜、塵溜等ノ消毒ニ供ス

一 昇汞水 (昇汞一分水二百乃至五百分) 木製器具等ノ消毒ニ供ス但手足ノ消毒ニハ煮水ヲ用ヒ

一分ト千分ノ割合ニテ製ス

一 格魯兒瓦斯 (格魯兒石灰一匁ニ粗製硫酸又ハ鹽酸二匁ヲ注キ瓦斯ヲ發生セシム)

厩舎、日光射入ノ惡シキ室内等ノ薰煙ニ供ス

一 亞硫酸瓦斯 (硫黃華ヲ火中ニ投シ瓦斯ヲ發生セシム)

應用格魯兒瓦斯ニ同シ但シ薰煙スルニ先チ舍内、器具

等ヲ濕メシ置クヲ要ス

一熱滷汁

(粗製加里又ハ曹達一分水二十分若クハ新製ノ木灰一分水五分ヲ煮沸シテ製ス)

廐舎、器具等ノ洗滌消毒ニ供ス

一熱氣 (攝氏百五十度以上)

衣服、器具等ノ消毒ニ供ス

一熱湯 (半時間以上沸騰ス)

衣服、廐舎、器具、瀝車、船舶等ノ消毒ニ供ス

第卅六項

左ニ各獸疫ノ病性、原因、症候等ヲ略説ス

一牛疫

(病性)牛疫ハ牛屬固有ノ熱性傳染病ニシテ羊、

山羊及他ノ反芻獸ニ傳染ス傳播ノ迅速ナル斃死ノ夥多

ナル獸疫中最モ險惡ノ症ナリトス

(原因)傳染毒ノ本態ハ未タ詳ナラスト雖固性並ニ揮發性

ニシテ病獸ノ呼氣、津唾、涙、鼻、口、眼ノ粘液、汗、糞、尿

血液並ニ體內諸臟器ニ存ス或ハ病獸ヨリ直接ニ傳染シ

或ハ間接ニ糞、敷藁、芻秣、毛、皮、肉、被服、瀝車、船舶、家畜商、犬、家禽等ノ媒介ニ由テ傳染ス

傳染毒ハ乾燥ノ氣中ニ在テハ速ニ死滅スルモノ、如シ

然レトモ適好ノ境遇ニ在テハ數週間乃至數箇月勢力ヲ

保ツ本疫ノ始テ侵入スルヤ其毒勢最モ強烈ナリ傳染毒

ハ攝氏六十度以上ノ熱、零以下十五度ノ寒氣、腐敗及諸

種ノ消毒藥ニ依リ滅殺スルコトヲ得

(症候)本病ハ急性ノ經過ヲ取リ主トシテ消化器粘膜炎ヲ侵

ス病毒ノ潜伏期ハ普通六日乃至九日トス初兆ハ熱候ニ

シテ體温ハ攝氏四十一度若クハ四十二度マテ昇騰シ脈

小ニシテ一分時ニ六十乃至百二十ヲ算シ泌乳、食慾共

ニ減少シ倦怠シテ頭ヲ低ルル如キ前兆ニ續テ惡寒戰

慄シ皮温不均、呼吸促進、各部ノ粘膜炎ハ特ニ紅ヲ潮シ食

思、反芻全ク止ミ反テ渴ヲ増ス通便遲滯シ糞ハ乾固ニ

シテ粘液ヲ附著シ間々輕キ痲痛ヲ發ス次テ眼、鼻、陰門

ヨリ液初期ハ漿液様次期ハ漿液ニ粘液ヲ雜ヘタルモノ  
 ナ漏ラシ大ニ流涎ス糞ハ漸次ニ柔軟流動狀トナリ大ニ  
 下利ス其糞汁ハ粘液様ニシテ惡臭ヲ放チ往々血液ヲ混  
 シ頻ニ努責窘迫シ直腸ノ粘膜翻轉露出ス病獸ハ遽ニ羸  
 瘦シ行歩踉蹌トシ時トツハ大ニ興奮シテ不安トナリ發  
 狂ノ狀ヲ呈シ或ハ呼吸困難トナリ重性肺炎ノ徵ヲ發ス  
 口腔及陰腔ノ粘膜ハ赤色ノ斑點若クハ綿條ヲ現ハシ灰  
 白色乃至灰黃色ノ乾酪様滲出物痂皮之ヲ覆フ其滲出物  
 ハ容易ニ剝脫シテ暗赤色ノ爛斑ヲ呈ス輕症ニ於テハ痂  
 皮、爛斑ヲ缺如スルコトアリ又皮膚ニ小結節、膿疱及痂  
 皮ヲ見ルコトアリ

以上ノ症候漸次亢進スルニ從ヒ眼、鼻、口ノ分泌液增多  
 シ惡臭ヲ放チ陰門、肛門哆開シ體温沈下シ虚脱ノ斃ル  
 (經過及豫後)豫後不良ニシテ大約一週日ヲ經レハ斃ル經  
 過ハ疫ノ性質及牛ノ種類ニ依テ差アリ侵入ノ初ニ當リ

テハ急劇ナルモ其終ニ及ヘハ漸ク輕緩トナル斃死ノ割  
 合ハ百頭ニ付凡ソ九十頭乃至九十五頭ナリ

二炭疽(病性)炭疽ハ一種ノ杆菌(バチルス、アントラシス)

ニ依テ發スル危險ノ傳染病ニシテ哺乳獸及鳥類ヲ侵シ  
 通常病獸ヨリ直接ニ傳染セズ人類、器具、芻秣、昆蟲等  
 ノ媒介ニ由テ傳染シ又地中潜伏ノ病毒ヨリ傳播ス

(原因)病毒ハ動物體ノ各部ニ存シ就中血液、分泌液、内臟  
 、糞便等ノ中ニ多シ此細菌ハ芽胞ヲ生ス而シテ芽胞ハ  
 頗ル抵抗力ニ富ミ容易ニ死滅セス地中ニ在テハ幾年間  
 勢力ヲ存スルヲ以テ極テ危險ナリ

(症候)此病ハ俄然發生シ危劇ノ經過ヲ取り多クハ一日乃  
 至三日以内ニ斃ル其主要ノ徵候ハ劇甚ノ全身違和、大  
 熱、粘膜出血トス此他皮膚ノ癰、浮腫、腸患、腦症、呼吸  
 困難ノ如キ局所症候アリ隨テ炭疽ニ種々ノ細別アリ  
 甲口局部發生ナキ者即チ通常芽胞傳染ニ依テ發スル者

ニ其急性、急性及次急性ノ別アリ(一)甚急性炭疽ニ在テハ腦卒中ノ狀ヲ呈シ數分時乃至一時間ニシテ口、鼻、肛門等ヨリ血液ヲ漏ラシ播擲ヲ發シテ斃ル牲々前夜壯健ノ獸翌朝ニ至テ斃死スルヲ見ルコトアリ又勞役、放牧若クハ採食中卒倒スルコトアリ此種ハ牛羊ニ多ク特ニ流行ノ初ニ方リテ屢々之ヲ見ル(二)急性炭疽ハ經過前者ニ比スレハ較々長ク二時間乃至十二時間ニ亘リ最モ長キハ二十四時間ヲ閱ス病獸ハ急ニ發熱シ(體温攝氏四十度乃至四十二度)腦充血又ハ肺充血ノ徵ヲ呈シ天然孔ヨリ血液ヲ漏ラシ播擲ヲ發シ遂ニ窒息ニ由テ斃ル時トシテハ症狀一時輕減シ再ビ舊ニ復ス(三)次急性炭疽ハ炭疽熱又ハ間歇性炭疽ト稱スルモノニシテ普通牛馬ニ於テ見ル所ノ症トス症候ノ大體ハ急性ニ同シキモ經過ハ平均二十四時乃至四十八時最モ長キハ五日乃至七日ニ彌ル熱候顯著ニシテ惡寒戰慄、皮温不定、

身大違和等ノ外肺充血及腦充血ノ徵ヲ發シ之ニ加フルニ重症腸患ノ狀痙痛ノ徵ヲ以テシ病勢ノ弛張頗ル頻繁ナリ

乙 局部發症アルモノ即チ通常杆菌傳染ニ依テ發スルモノナリ皮膚ノ癰及浮腫ハ特ニ牛馬多ク癰ハ限局シ其初メ硬固ニシテ熱痛ヲ帶フルモ後ニハ寒冷無痛ニシテ脱疽ニ陥ル浮腫ハ扁平捏粉樣ニシテ往々波動シ寒冷無痛ナリ經過ハ三日乃至七日ニ亘リ治癒スルモノ少シトセス腫瘍發生ノ前後ハ發熱ス

又癰及浮腫ハ舌、咽喉及直腸ニ發ス所謂舌炭疽、咽喉炭疽、直腸炭疽是ナリ此等ノ場合ニ於テハ癰ノ外熱、呼吸困難、喉頭狹窄音、膈下困難、一般ノ「チアノーゼ」ヲ呈シ頸下、頸、胸前等ニ腫瘍ヲ發シ通便ニ方リ窘迫シ疼痛ヲ訴ヘ十二時乃至二十四時間内ニ斃ル此種ハ豕、犬ニ最モ多シ

動物ノ種類上ヨリ論ズレハ間歇性炭疽、炭疽性卒中及  
癰ハ牛馬ニ多ク羊ニ在テハ炭疽性中ヲ主トシ犬ニ在テ  
ハ癰、豕ニ在テハ咽喉及舌ノ炭疽ヲ主トス

(豫後)豫後ハ概シテ不良ニシテ斃死ノ割合ハ百頭ニ付凡  
ソ七十頭乃至九十頭トス最急性ノモノハ悉ク死ス時ト  
シテ經過輕易ニシテ自然ニ治スルモノ亦ナキニアラス  
一タヒ此症ニ罹リテ快復スレハ暫時免病質トナル

(公衆衛生上ノ關係)炭疽ハ人ニ傳染シ險惡ノ症ヲ發セシ  
ムルヲ以テ公衆衛生上至大ノ關係アリ愛知縣、埼玉縣  
ニ於テハ往年此傳染ノ爲メ惡疾ヲ發シ死去シタル者ア  
リ而シテ人ノ傳染スルハ創傷ヨリ毒ヲ受ケ又ハ病獸ノ  
肉ヲ食スルニ由ル

三氣腫疽(病性)本病ハ特異ノ細菌ニ依テ發スル牛ノ傳染病  
ニシテ主トシテ幼牛ヲ侵ス其病毒ハ皮膚又ハ粘膜ノ傷  
創ヨリ體內ニ入ル

(原因)病毒ハ抵抗力至大ニシテ二年間モ發芽力ヲ失ハズ  
尋常薄弱ノ消毒藥ハ病毒ヲ殺滅スルヲ得ス本病ノ常在  
地ニ於テハ病毒ハ地中ニ存シ之ヨリ傳染ス

(症候)氣腫疽ハ急劇ノ傳染病ニシテ皮膚ニ啞癢性ノ腫瘍  
所調氣腫ヲ發シ全身症狀、水脈腺腫及運動異常ヲ呈ス  
氣腫ハ體ノ諸部位ノ上部、頸、肩、胸下、腰、十字部等ニ  
發スルモ飛節及腕節ヨリ下方ニハ骨ヲ蝕スルコトナシ  
罕ニハ口蓋、舌根、咽頭ニ發スルコトアリ腫瘍ハ初起小  
ニシテ疼痛ヲ帶ヒ速ニ蔓延シ數時間内ニ於テ非常ニ巨  
大トナリ甚シキハ全軀幹ニ散蔓スルコトアリ試ミニ腫  
瘍ヲ壓スレハ啞癢音鹽ヲ火中ニ投シテ燒クガ如キ音ヲ  
發シ之ヲ打テハ鼓音ヲ放チ瘍ノ中央ハ乾燥無感覺ニシ  
テ黑色ヲ帶ビ皮革ノ如シ甚キハ全ク壞死シテ冷却ス之  
ヲ切ルモ疼痛ヲ覺エズ暗赤色ニシテ惡臭アルノ泡沫液  
ヲ漏ラヌ腫瘍ハ一箇ニ過キサルモノアリ又數多簇發ス

ルモノアリ腫瘍鄰接ノ水脈腺ハ大ニ腫張ス  
全身症狀トシテハ食欲、反芻頓ニ廢絶シ病獸ハ倦怠沈  
憂シ大熱攝氏四十二度マテテ發シ肢ニ氣腫アルガ爲メ  
大ニ運動異常ヲ呈シ或ハ跛行シ或ハ步履強拘トナリ或  
ハ四肢ヲ地上ニ曳ク氣腫ノ蔓延スルニ從ヒ呼吸愈々促  
迫シ時トシテハ痲痛ヲ發シ急ニ虛脱シテ斃ル

(潜伏期及經過)潜伏期ハ平均二日ナリ病性急劇ナルヲ以  
テ發病後一日半乃至三日ニシテ斃レ治スルコト罕ナリ  
四鼻疽及皮疽(病性)本病ハ馬屬ニ發スル惡性傳染病ニシテ  
一種特異ノ細菌ニ原因シ皮膚、水脈系及呼吸器ヲ侵ス  
モノトス

(原因)本病ハ直接ニ病獸ヨリ健獸ニ傳染シ又馬具、被衣  
、飼槽等ノ如キ媒介物ニ依テ傳染ス皮膚、潰瘍ノ分泌液  
、鼻ノ漏液ハ最モ傳染力ヲ逞フスルモ病毒ハ又諸内臟  
及血液中ニ存ス病毒侵入ノ徑路ハ呼吸器粘膜、皮膚及

消化器粘膜トス

(症候)本病ニ慢性ト急性トノ二種アリ各其症候ヲ異ニス。

甲 慢性症ノ初發ハ緩慢陰微ニシテ年月ノ久キニ彌ル  
ヲ以テ人多クハ之ヲ覺ラズ隨テ從前ハ非常ニ長キ潜伏  
期ヲ有スルモノト看做シタリ然ルニ接種試験ニ依レハ  
潜伏期ハ僅々三日乃至五日ニ過キズ

鼻道ノ主徴ニ三アリ(其一)鼻ノ一孔若クハ兩孔ヨリ灰  
白色ノ粘液少量ヲ漏ラス末期ニ至レハ潰瘍ヨリ出ル灰  
黃色又ハ灰綠色ノ粘稠液ニ清澄水様ノ加答兒分泌液ヲ  
混ス其狀恰モ菜種油ニ蛋白ヲ混シタルガ如シ又往々漏  
液中ニ血液ヲ混ズ(其二)鼻粘膜ニ小結節受潰瘍ヲ生ズ  
時トシテハ此二者全ク缺如シ或ハ晚期ニ至リ始テ發生  
ス鼻腔下端ノ小結節ハ管ニ目撃シ得ルノミナラス又指  
以テ觸ル、チ得ヘシ小結節ハ速ニ潰瘍ニ變ズ潰瘍ハ深  
淺一ナラス瘍底ハ凹陷シテ彖脂狀ヲ呈シ少量ノ惡性膿

ヲ漏ラス瘍縁ハ突隆シテ蟲蝕セラレタルガ如キ觀アリ  
 (其二)顎下水脈腺腫脹シ概テ下顎骨ノ内側ニ固著シテ  
 膿腫セス

營養漸次不良トナリ皮膚粗剛、毛色光澤ヲ失ヒ全身羸  
 弱シ呼吸困難ヲ加ヘ咳嗽頻發ス不正ノ弛張熱又ハ間歇  
 熱ヲ檢定スルコトアリ又衄血、血尿及骨折ノ素因ヲ認  
 ムルコトアリ末期ニ及ヘハ四肢、胸腹ノ下面ニ浮腫ヲ  
 發シ關節、陰囊、睪丸等ニ炎腫ヲ生ス

皮疽ハ前胸、肩、胸、腹、四肢或ハ其他ノ部位ノ皮膚及皮  
 下織ニ豌豆大乃至胡桃大ノ結節ヲ生シ初ハ硬固ニシテ  
 且疼痛アリ然レトモ漸次其結節ノ中心柔軟トナリ波動  
 ナ呈シ終ニ破潰シテ噴火口ノ狀ヲ呈シ黃色ノ液ヲ漏泄  
 ス小潰瘍ハ痂皮ニ覆ハル、モノアリ病勢ノ進ムニ從ヒ  
 結節(所謂球腫)累々發生シ各潰瘍ニ連絡セル水脈管ハ  
 腫起シテ索狀ヲ呈シ(所謂索腫)處々新球腫ヲ發シ恰モ

念珠ノ如シ關係アルノ水脈腺亦腫脹硬結シ又ハ膿ヲ醸  
 ス久シキヲ經レハ大ニ衰弱シ甚シキハ斃ル

乙 急性症ハ比較的馬ニ少ク驢騾ニ多シ初ヨリ急性ノ  
 經過ヲ取リ或ハ慢性ノ症全身ニ汎發シテ急性トナリ或  
 ハ他ノ急性病ト合併シテ來ル接種皮鼻疽ハ必ス急性ナ  
 リ病獸ハ急劇ナル敗血性傳染病ノ徵ニシテ呼吸器粘膜  
 潰爛シ皮膚、肺臟及他ノ臟器ニ病毒轉移ヲ致ス

本症ハ寒戰、大熱(攝氏四十二度マテ昇騰ス)ヲ發シ鼻  
 孔ヨリ膿樣粘液ヲ漏シ晚期ニ至レハ血液及敗膿ヲ泄ラ  
 シ間々之ニ唾液、食餌ヲ混ス鼻粘膜ハ小結節及潰瘍ヲ  
 發シ潰瘍ハ往々彼此湊合シ終ニ鼻粘膜ノ全部潰爛シ實  
 扶的里塊ヲ被ムル斯ノ如キ變化ハ僅々二三日内ニ發生  
 ス呼吸ハ同時ニ促進シ氣息喘々タリ右ノ他更ニ皮疽ヲ  
 發シ皮膚ノ浮腫、球腫、潰瘍、水脈管ノ索腫、水脈腺ノ腫  
 脹、化膿ヲ見ル食慾減損嚙下間々困難ニシテ下利ヲ發シ

尿ハ季量ノ蛋白ヲ含ミ體軀ハ急ニ瘦削ス

(經過及豫後)慢性ノ鼻疽及皮疽ハ緩慢ニシテ數週、數箇月若クハ數年ノ久キヲ經テ鼻粘膜又ハ皮膚ヨリ肺ニ轉移ス(所謂隱性反疽)極テ頑固ノ症ハ七年ニ彌ルコトアリト云フ急性ハ三日乃至十四日ニシテ斃ル

(公衆衛生上ノ關係)鼻疽及皮疽ノ病毒ハ創傷面ヨリ人ニ傳染シ致命ノ症ヲ發スルヲ以テ病馬ニ觸ル、者ハ慎重ノ注意ヲ要ス

五傳染性胸膜肺炎(病性)傳染性胸膜肺炎ニハ一ニ肺疫ト稱ス牛屬特異ノ傳染病ニシテ肺及胸膜ニ炎症ヲ發ス牛疫ニ亞ク險惡ノ症ニシテ最初散發スルコトアルモ多クハ地方性ヲ呈シ或ハ大ニ流行シ某地方ニ於テハ常在病トナル牛屬ノ外山羊ニ發スト云フ

(原因)病毒ハ一種ノ細菌ニシテ主トシテ病牛ノ呼氣中ニ存シ直接ニ病牛ヨリ健牛ニ傳染シ或ハ人及他ノ媒介物

ニ依リ間接ニ傳染ス牛商ノ貸厩ハ傳播上極テ危險ナリ  
病毒ハ頗ル抵抗力ニ富ミ傳染厩舎ニ在テハ數箇月若クハ一年餘モ有力ナリ

(症候)潜伏期ハ平均三週乃至六週日ニシテ一タヒ之ニ罹リタル牛ハ數年間又ハ終生免病ス本病ニ慢性ト急性トノ二期アリ

甲 慢性期即チ發生期ニシテ一ニ隱症期ト稱ス慢生肺病ノ徵ヲ發シ二週乃至六週ニ亘ル罕ニハ數日ニ過キス肺ノ小葉ニ微細ノ病竈アルニ過キサルヲ以テ初起ハ短ク且乾キタル痛咳ヲ發シ漸々其數ヲ増シ強キ濕聲ノ咳嗽頻發スルニ至ル食慾、泌乳共ニ減少シテ三十九度乃至四十度ノ熱ヲ發シ皮温均一ナラス肺ノ打診、聽診ノ結果ハ殆ント常態ニ異ナラサルカ或ハ氣胞音ノ常ヨリモ粗厲若クハ微弱ナルヲ聞ク肋間部ヲ壓スレハ疼痛ヲ訴フ罕ニハ此期ニ於テ治ス

乙 急性期一ニ發濕期ト稱シ此期ニ至レハ熱勢大ニ亢進シテ肋膜炎ノ諸徵明瞭トナリ呼吸疾速、困難、前肢ヲ開張シテ起立シ臥スコトヲ欲セス鼻孔露開シ臍部ノ波動甚シク呼吸スル毎ニ呻吟ス試ニ背、腰及肋間部ヲ壓スレハ苦悶ヲ訴フ咳嗽ハ温嘔聲ヲ帯ヒ咳スル毎ニ苦悶ス又鼻孔ヨリ粘液ヲ漏ラシ間々之ニ血液ヲ混シ或ハ惡息膿様ノ液ヲ漏泄ス打診スレハ初期ニ誠音後ニハ濁音ヲ發ス而シテ濁音ハ肺ノ大部ヲ占ム聽診スレハ氣胞音微弱若クハ全缺其代リトシテ氣管支呼吸、羅音及摩擦音ヲ聞ク肺ノ健部ニ於テハ氣胞音粗厲ナリ體温攝氏四十度乃至四十二度脈八十乃至百若クハ其以上ヲ算シ皮温定ラス鼻端乾燥、皮膚粗剛、食慾、反芻、泌乳共ニ休止、煩渴引飲、通便澀、尿ハ蛋白ヲ含ミ、孕牛ハ流産シ易シ病久キヲ經レハ呼吸益困難ヲ加ヘ胸垂、胸下四肢ニ浮腫ヲ發シ倦怠、羸瘦甚シク終ニ窒息シテ斃ル

(經過及豫後) 肺疫ノ經過ハ時トシテハ急性時トシテハ慢性ナリ概シテ強壯ノ幼獸竝ニ良美ノ食ヲ喫スルモノニ在テハ急劇ニシテ老獸竝ニ水分過多ノ食ヲ取ルモノニ於テハ緩慢ニシテ險惡ナリ病獸百頭ニ付五十頭乃至七十頭ハ斃死シ三十頭ハ治癒不全ニシテ肺臟ニ慢性ノ變化ヲ貽スモノ多シ

牛ノ大群ニ於テハ疫ノ經過ハ奇異ニシテ初メ數頭ニ散發シ數週ヲ經ルノ後他ノ牛ヲ侵シ次テ大ニ蔓延ス斯ノ如クシテ疫ハ一廐舎ニ存在スルコト數箇月若クハ半年ノ久シキニ亘リ終ニ常在病トナル

六 流行性鵝口瘡(病性) 流行性鵝口瘡ハ一名ヲ口蹄疫ト云フ急性發疹ニ屬スル所ノ傳染病ニシテ口腔粘膜、趾間ノ皮膚及乳房ニ水泡ヲ發シ主トシテ牛、羊、山羊乃豕ニ發ス罕ニハ馬、犬、猫及家禽ニ傳染ス又人ニ傳染スルコト罕ナリトセス一タヒ此症ニ羅ルモ免病質ヲ得ス

(原因) 病毒ノ本態ニ關シ區々ノ説アリト雖未タ明確ナラ  
 ス病毒ハ唾液、水疱ノ含液、乳汁、血液、糞尿、呼氣等ニ  
 存シ頗ル粘靱ニ糞便等ノ中ニ在テハ數箇月若クハ一  
 年間モ有力ナリ病獸ヨリ直接ニ傳染シ或ハ媒介物ニ由  
 リ間接ニ傳染ス而シテ疫ハ專ラ交通貿易ニ依テ傳播ス  
 (症候) 牛ニ於テハ口腔粘膜、蹄冠及ヒ趾間ノ皮膚ニ水疱  
 及潰瘍ヲ發シ羊、山羊、豕ニ在テハ病症概テ足部ニ局限  
 ス

(一) 口腔ノ症候平均三日乃至五日ノ潜伏期ヲ經テ發熱  
 シ口腔粘膜紅チ潮シ食慾、泌乳減少シ反芻休止兩三日  
 ナ經レハ齒齦、舌、頬、唇等ニ麻仁大ノ黃白色水疱ヲ點  
 見ス此水疱ハ漸々増大シ間々甲乙湊合ス初メ澄液ヲ含  
 ムモ後ニ至レハ渾濁シ膿様ノ液ニ變ス終ニ水疱ハ破潰  
 シテ深紅色ノ上皮剝脫面ヲ呈シ(所謂爛斑)類ニ唾液ヲ  
 漏ラヌ水疱多クハ鼻鏡ニ蔓延ス本病ノ經過中病獸ハ大

ニ羸瘦シ乳汁ハ一變シテ黃白色ヲ帶凝固シ易ク其味佳  
 チラス乳脂、乾酪ヲ製シ難シ

病ノ經過ハ一二週日ニ過キサルモ合併症アルトキハ經  
 過一變ス合併症ハ乳房ノ發疹、乳房炎、咽喉炎(嚥下困  
 難、食餌逆出咳嗽)異物性肺炎、鼻腔及氣管支加答兒等  
 ナリ又口腔ノ滲出劇甚ナルトキハ格魯布様ノ附著物ハ  
 上皮ト共ニ分解シ臭氣ヲ放ツ又哺乳ノ幼獸ハ重性胃腸  
 加答兒ヲ發スルヲアリ又子宮、陰腔、胸腹ノ皮膚竝ニ角  
 膜ニ水疱ヲ發ス又角ノ實質發炎シ角根ニ水疱ヲ發シ脫  
 角スルコトアリ

(二) 蹄ノ症候蹄冠部及趾間ノ皮膚ハ口腔粘膜ノ如ク紅  
 チ潮シ熱痛ヲ帶ヒ一兩日ヲ經テ水疱ヲ發ス水疱破潰ス  
 レハ病獸趁跛シ多クハ伏臥ス通常一二週日ヲ經テ治ス  
 合併症ハ趾間皮膚ノ羅斯性炎症、潰瘍、膿腫、瘻道、關節  
 炎、骨疽、脫蹄、膿毒症、尋創等トス

(經過及豫後) 口蹄疫ノ經過ハ年ニ依テ輕重ノ別アルモ概シテ定型的ノ良性經過ヲ取リ二三週日內ニ癒ユ斃死ハ皆無若クハ百頭中僅ニ一頭ニ過キス然レトモ或ル年ニ於テハ惡性ニシテ成長獸ハ百頭中一頭乃至五頭哺乳幼獸ハ五十頭乃至八十頭斃死ス

一廐舍若クハ一獸群中ニ於ケル疫ノ經過ハ四週乃至六週日ニ亘リ通常速ニ傳播スルモ或ハ徐々蔓延スルコトアリ一旦治癒ニ赴ケハ羸瘦セル者速ニ舊態ニ復ス時トシテハ瘦削、泌乳減少、皮膚粗剛、乳房炎、經久蹄病、痒性皮疹、跛行等ノ如キ餘病ヲ貽スコトアリ

七羊痘(病性) 羊痘ハ羊屬固有ノ熱性傳染病ニシテ皮膚ニ痘瘡ヲ發ス群羊ニ傳播シ大ニ羊毛ヲ損スルヲ以テ農業經濟上至大ノ關係アリ

(原因) 傳染毒ハ固性竝ニ揮發性ニシテ病羊ノ排泄物、分泌物、呼氣、皮膚蒸發等ニ存シ痘漿中ニ多シ毒性ハ粘韌

ナルヲ以テ其病毒ニ汚染セル羊舎ニ在テハ五六箇月間モ毒力ヲ存スト雖消毒藥ヲ施セハ容易ニ死滅ス

本病ハ病羊、種痘羊ヲ健羊ノ群中ニ牽入ル、ニ依リ又媒介物(牧羊者、犬、衣服、羊毛、糞、飼料、瀋車等)ニ由テ傳播ス牛、山羊、豕及人ニモ傳染スルコトアリト云フ

(症候) 平均四日乃至七日ノ潜伏期ヲ經テ發熱シ倦怠、沈鬱、頭ヲ低レ食欲、反芻共ニ減少ス體温ハ四十一度乃至四十二度マテ昇騰シ脈搏疾速、呼吸増數、結膜潮紅シ眼鼻ヨリ漿液ヲ漏ラシ一二日ヲ經レハ手ノ稀疎ナル局部(顔面、四肢ノ内面、胸腹、尾ノ下面)ニ紅斑ヲ發ス罕ニハ密毛ヲ帶ル部竝ニ口腔、咽頭ノ粘膜ニ發疹ヲ見ルコトアリ發疹後第五日ニハ小結節ノ頂頭褪色シ紅暈ヲ匝ラシ痘圍ノ皮膚ハ腫脹ス之ト同時ニ熱ハ減退シ更ニ數日ヲ經レハ水疱増大ス水疱ハ隆起シ或ハ扁平ニシテ淋巴様ノ無色液若クハ黃赤色ノ液ヲ含ム發疹後六日乃至

七日ヲ經レハ熟痘トナル爾後痘漿愈々渾濁シ膿疱ニ變シ熱候兀進シ眼、鼻腔、咽喉及氣管支ノ粘膜ハ加答兒性炎症ヲ發シ眼及鼻孔ヨリ膿樣粘液ヲ漏ラシ流涎、食餌吐出、嚥下困難、咳嗽、呼吸促進ヲ呈ス時トシテハ頭部大ニ腫脹シ皮膚ノ蒸發氣惡臭ヲ放ツ終ニ痘ハ乾涸結痂シ二三週許ニシテ脱落ス

(經過及豫後)輕症ハ少數ノ痘ヲ散發シ輕易ノ熱候ヲ呈スルノミ重症ニ於テハ瘡痘簇發シ數多ノ痘ハ湊合シ大化膿面トナリ皮膚ハ劇性炎ヲ發シ甚シキハ皮膚ノ壞疽ヲ起シ惡臭ヲ放ツ所謂屍臭痘是ナリ此ノ如キ症ハ熱度頗ハ高ク口腔、咽喉、氣管支及角膜ニ痘ヲ發シ關係アルノ水脈腺ハ大ニ腫脹シ間々化膿ス粘膿ノ炎症ハ格魯布性ヲ帶ヒ往々格魯布性肺炎ヲ發ス惡性經過ニ於テハ敗血症及膿毒症ヲ發シ關節、漿液膜、腦等ニ病毒轉移ヲ致ス或ハ肺炎又ハ喉頭格魯布ノ爲メ窒息シテ斃ル此種ノ痘

瘡ハ假令ヒ治癒スルモ長キ時日ヲ要シ病羊ハ羸弱シ全體ノ毛ヲ脫シ深キ癢痕ト慢性跛行又ハ失明ヲ貽ス出血性痘瘡ニ於テハ皮膚、粘膜ノ所々出血シ腐壞スルニ至ル之ヲ腐痘ト云フ

羊群中ニ於ケル痘ノ經過ハ急慢善惡一定セス死亡ノ割合ハ通常百頭ニ付十頭乃至二十頭惡性ハ五十頭若クハ其以上ナリ故ニ其重症、老獸並ニ幼弱ノ獸ニ於テハ豫後不良ナリ羊毛脱落、體重減少、流産、貽後病ノ如キ間接ノ損害極テ大ナリ

#### 八 豕虎列刺(病性)

豕虎列刺ニ腸症ト肺症トノ二種アリ腸症

ニ於テハ大腸ノ實扶的里性炎症並ニ其附近水脈腺ノ腫脹ヲ發シ往々肺炎ヲ合併ス英、米、瑞西、丁抹ノ諸國ニ於テ大ニ流行シ通常病獸ノ肉若クハ病毒ヲ含メル食物ヲ啖フニ由テ腸ヨリ傳染ス肺症ハ卵圓形細菌ニ由テ發スル傳染性ノ胸膜肺炎ニシテ肺ノ壞死及慢性乾酪性變

化チ發生シ易シ

(原因)腸症ノ傳染毒ハ長卵圓形ノ細菌ニシテ運動力チ有シ長サ一・二乃至一・五「ミクロミリメートル」幅之ニ半バシ中央ハ淡明ナリ(フロツシユ氏説)

肺症ノ傳染毒ハ卵圓形ノ細菌ニシテ運動セズ長サ一・二「ミクロミリメートル」幅〇・四乃至〇・五「ミクロミリメートル」兩極ノミ染色シ中央ハ染色セズ頗ル家兔ノ敗血菌ニ類シ又家禽虎列刺及出血性敗血症ノ細菌ニ類ス此細菌ハ特ニ肺ノ壞疽竈、肋膜滲出及氣管支水脈腺中ニ夥シク又血液、腹腔ノ臟器(殊ニ脾臟)ニ存ス病毒ハ揮發性ニシテ重ニ呼氣ニ由テ傳染シ其傳染方頗ル劇烈ナリ豕ノ驅逐、往來ハ傳播上最モ危險ノ媒介ナリトス而シテ恐ラクハ皮膚ノ創傷及腸ヨリモ亦傳染スルモノナラント云フ

(症候)腸症ト肺症トハ各徵候チ異ニシ兩症トモニ急性ト

慢性トノ區別アリ

甲 急性腸症ハ豕疫侵入ノ初メニ於テ之チ見ル平均ノ經過ハ五日乃至八日ニシテ初起ニハ食欲減損及ビ通便秘澁ノ兆チ呈シ倦怠、鬱憂、頭、尾チ低レ結膜潮紅シ眼瞼ニ乾涸ノ粘液チ凝著ス體温攝氏四十一度以上四十二度呼吸促迫時トシテハ鼻孔ヨリ膿樣粘液チ漏ラス晚期ニ至レハ下利シ糞ハ稀薄ノ液狀ニシテ惡臭チ放チ間々血液チ混ス舌、頰、口蓋、軟口蓋、扁桃腺ニハ灰白色若クハ灰黃色ノ實扶的里性潰瘍チ發ス又耳、鼻端、復ノ下面、肢ノ内面竝ニ紅斑チ見ルコト罕ナリトセス最末期ニ至レハ病獸羸弱シ伏臥スレハ復々起立スルコト能ハス播擲チ發シテ斃ル

慢性腸症ニ在テハ毫モ顯著ノ病徵ナシ唯虛弱ニシテ能ク發育セス時々咳嗽、下利、皮疹チ生シ又耳ニ淡紅斑チ發ス

乙 急性肺症ハ頗ル急劇ニシテ往々數時間ニ斃ル其主徵ハ頸、脚等ノ皮膚ノ紅斑乃大腫脹、咳嗽、呼吸困難、大熱及卒急ノ羸弱ニ在リ初起病豕ハ稍々興奮シ續テ倦怠癆勞シ弛張性ノ大熱ヲ發シ少ク寒戰シ食慾減損、通便秘結ス此初期ニ於テ外觀上往々一時輕快トナルモ三四日ヲ經レハ短ク且乾キタル痙攣性ノ咳嗽ヲ發シ發吸促進シ咳嗽ノ發作中ハ頭部粘膿藍紫色ヲ呈シ大ニ疲勞シ窒息ノ虞アリ呼吸困難、咳嗽ノ發作、熱候竝ニ衰弱ハ益重キヲ加ヘ肺ヲ聽診スレハ氣管支呼吸、摩擦音及微弱ノ氣胞音ヲ聞ク終ニ病豕ハ蓐藁中ニ潜伏シ咳嗽ノ際頭ヲ舉ケ得ルノミ急往經過ハ平均三時間乃至九時間ナリト云フ

慢性肺症ニ在テハ肺ノ慢性病竈ハ肺癆ノ徵ヲ呈シ咳嗽、呼吸困難、鼻漏、羸瘦、鱗屑狀濕疹、下利、貧血、麻痺ヲ發ス寄生性肺炎ト誤診シ易シ

家羅斯疫(病性)家羅斯疫ハ一種ノ細菌ニ由テ發スル特異

ノ敗血症ニシテ出血性胃腸炎竝ニ腎炎、脾腫及肝臟、

(原因)病毒ハ主トシテ消化器ヨリ侵入シ肺ヨリ侵入セザ

ルモノ、如シ蓋シ病毒ハ毛細管ヲ填塞シ屍毒様ノ毒素ヲ生ス而シテ其毒素ハ神經系、筋肉竝ニ大腺體ノ實質ヲ害ス家兎ノ體內ニ於テハ病毒減衰スト云フ本病ハ直接傳染ニ由テ蔓延シ病毒ヲ含メル糞又ハ病獸ノ肉、内臟等ヲ食スルニ依テ傳染スルモノ最モ多シ一回罹病シタルモノハ概テ免病ス而シテ本病ノ細菌ハ瀝水中ニ蕃殖ス故ニ泥沼沮洳ノ地方ニ於テハ常在病トナリ專ラ夏期ニ流行ス

三箇月乃至十二箇月ノ幼豚最モ之ニ罹リ易ク産初第一月ニハ素因最モ少シ三歳ノ老豕モ罕ニハ傳染スルコトアリ哺乳幼豚ハ病母ノ乳ニ於テ傳染セザルト云フ豕ノ

種類ニ依テ罹病性ニ差異アルハ諸家ノ實驗ニ徴シテ明ナリ

(症候) 病毒ノ潜伏期ハ最短三日ニシテ俄然劇症ヲ發ス病家ハ食ヲ嫌フテ嘔吐シ大熱(攝氏四十三度マテ)及神經障礙ヲ發シ倦怠、沈鬱、嗜眠、褥下潜匿後肢ノ痠弱痲痺等ノ諸徴ヲ呈シ間々筋肉痙攣及咬牙ヲ認ム初期ハ通便祕澁シ結膜暗赤色若クハ褐赤色ヲ帶ヒ眼瞼腫起シ復、胸ノ下面、會陰、脚ノ内面、耳、頭ノ如キ皮膚薄弱ノ部ニ掌大ノ紅斑ヲ發ス紅斑ハ鬱血ニ基クモノニシテ其初メ淡紅ナルモ後ニ至レハ暗赤色若クハ藍赤色トナリ間々増大シ甲乙湊合シ疼痛ヲ帶ビス又隆起セス次テ病獸ノ糞ハ柔軟水様トナリ罕ニハ血液ヲ混ス末期ニ至レハ肺浮腫ノ爲メ呼吸大ニ促進シ全身「チアノーゼ」ヲ發シ體温沈下シ三四日ニシテ斃ル極テ急劇ノ症ハ二十四時間内ニ斃ル經過ノ長キ者ハ八日若クハ其以上ニ渉ル

(豫後) 死亡ノ割合ハ百頭ニ付五十頭乃至八十五頭ナリ豫後ハ概テ不良ナルモ經過四日ヲ超ユルモノハ稍々佳良ニシテ治癒ノ望アリ

十狂大病(病性) 狂大病ハ犬屬ノ固有傳染病ニシテ狂犬ノ咬傷ニ由テ人、家畜(犬、猫、牛、馬屬、豕、羊、山羊)家禽及野獸ニ傳染ス

(原因) 傳染毒ノ本態ニ關シテハ諸種ノ説アルモ未タ明確ナラス病毒ハ腦、脊髓及唾液中ニ存シ體外ニ於テハ發育セス

(症候) 潜伏期ハ一定セス犬ニ於テハ平均三週乃至六週ニシテ長キハ數月ニ亘リ短キハ數日ニ過キス狂大病ニ噪狂、鬱狂ノ二種アリ固ト是レ同一ノ病ニシテ唯症狀ヲ異ニスルノミ「パストール氏」ノ説ニ據レハ噪狂ハ主トシテ腦ヲ侵ストキ及病毒ヲ直接ニ腦ニ接種スルトキニ發シ鬱狂ハ專ラ脊髓ヲ侵ストキ又ハ病毒ヲ皮下ニ接種

スルトキニ發スト云フ噪狂ハ鬱狂ニ變シ鬱狂亦噪狂ニ轉スルコトアリ又二者ノ中間ニ位スル症狀アリ而シテ狂犬病ハ定型的ノ急性病ニシテ必ス死ニ歸スル者トス甲 噪狂燥狂ニ三期アリ前驅期、刺戟期、痲痺期是ナリ

(一)前驅期又ハ沈憂期ハ半日乃至二日間持續ス此間病犬ノ舉動一變シ憚惡執拗トナリ不安ニシテ憤怒、驚愕シ易ク動モスレハ尋下ニ潜匿シ頻ニ居所ヲ變シ時ニ卒然跳起ス罕ニハ從順、温和ナル者アリ又咬傷部ニ異常ノ癢覺ヲ感シ自テ之ヲ嚙ミ或ハ之ヲ舐ム味覺亦一變シ常食ヲ嫌ヒ好テ寒冷ノ物ヲ舐メ蕪草、土石、木片、硝子ノ碎片、襪襪ノ如キ種々ノ異物ヲ嚙下シ甚シキハ自己ノ糞尿ヲ啖フ或ハ絶エス自己若クハ他犬ノ生殖器ヲ嗅ギ若クハ之ヲ舐ム此期ニ於テ已ニ輕微ノ咽頭痙攣、嘔意及ヒ便秘ヲ見ル(二)刺戟期ハ三四日ニ亘リ狂亂及

痙攣ノ發作ヲ來シ各發作ハ數時間ニ渉ル此期ニ於テハ不安ノ徵益々加ハリ柵柵、鐵鎖等ヲ嚙斷シ或ハ窓戶ヲ破壞シテ逃逸セント欲ス戶外ニ左レハ目的ヲクシテ奔走シ間々遠隔ノ地ニ到ル又大ニ咬癖ヲ發シ眞ニ發狂ノ狀ヲ呈シ人畜ヲ間ハス途中ニ遭遇スル者ハ悉ク之ヲ咬傷ス其咬傷力ノ劇シキ間々齒牙ヲ破碎スルニ至ル又自體ノ尾、陰具、四肢等ヲ嚙ム者アリ人畜ヲ避ケ全ク人ヲ咬傷スルノ傾向ナキモノハ例外ニ屬ス音聲ハ全ク一變シ粗嘎ノ聲ヲ放テ哮吠ス蓋シ變聲ハ聲帶ノ痲痺ニ由ルモノニシテ診斷上ノ一大要徵ナリ或ハ狂亂セスシテ專ラ沈鬱ノ狀ヲ呈シ痴鈍幻惑一所ヲ凝眸虛視シ空中ニ向テ蠅ヲ捕フル狀ヲナシ經エス吠鳴シ鞭筆ヲ意トセサルモノアリ但シ馴育宜キヲ得タル犬ハ瞑目ニ至ルマテ主人ノ命ニ服スル者アルモ斯ノ如キハ絶無稀有ニ屬ス(三)痲痺期又ハ末期ニ於テハ病獸大ニ羸瘦シ粗毛豎起

眼球陷沒、咽喉麻痺シテ一物ヲモ嚙下スル能ハス大ニ涎ヲ流ス續テ下顎麻痺シ口ヲ哆キ舌ヲ出ス終ニ後肢、尾、直腸、膀胱亦癱瘓シ五日乃至八日(遅クモ第十日)ヲ經レハ腦麻痺及全身虚脱ノ爲ニ斃ル狂犬病ノ經過中體温ノ高低ニ關シテハ定説ナシ(ヘリソグ氏)等ハ攝氏三度以上モ昇騰シ又速ニ沈下スルヲ見ダリ

乙 鬱狂 噪狂ト異ナル點ハ刺戟狂亂期ヲ缺如スルカ若クハ其期極テ短ク夙ニ下顎麻痺ヲ發スルニアリ

明治三十年七月廿七日印刷  
 明治三十年八月一日出版

編纂者 佐野 信吉

大阪府豊能郡池田町千八百十一番屋敷寄留

發行兼 榎 平 明 義  
 印刷者

大阪府豊能郡池田町千八百四番屋敷